学校内における「女体育教師」という存在
～ラベリング論の視点から～

○野村　圭（東京学芸大学）

キーワード：学校体育　女性体育教師　ラベリング論

１．目的

わが国では、男性体育教師養成から遅れること約四半世紀後の１９０２年に、女性体育教師養成が始まった。その後、今日に至るまでに、体育教師という職場に存在するジェンダーバイアスについて、様々な視点からの指摘がある。例えば、女性体育教師は身体性を根拠に男性体育教師より劣った存在、「二流の体育教師」としてみなされてきた。また、１９８９年の文部省学習指導要領の改訂により、教育内容上の男女差がなくなったものの、掛水（２００４）の報告からもわかるように、依然として女性体育教師は体育教師というよりも、「ダンス教師」としてのイメージを付与されている。つまり、女性体育教師は男性体育教師とは異なる「女体育教師」として差異化され、体育教師からある種「逸脱した存在」として捉えられていると言える。

このような女性体育教師の逸脱を、社会学における「個人が規範から逸脱する」という伝統的な逸脱論の考え方に当てはめると、逸脱する原因は、女性体育教師に体育教師としての資質能力が足りないと考えることができる。他方で、「社会や他者が個人を逸脱させる」というラベリング論の視点から考えると、女性体育教師は他者により「女体育教師」というラベルを貼られ、一人ひとりの能力に関わらずに逸脱させられていると考えられる。

井谷（２００５）は「体育教師という職場が組織的にもその仕事の内容からも『男の職場』として機能しており、男性中心のジェンダー・カルチャーを内包している」と指摘し、従来からの体育教師文化に疑問を投げかけている。このように、女性体育教師がレッテル貼りされることの原因を、女性体育教師個人ではなく、現在の体育教師を支えている規範にあると捉えている研究は多くある。しかし、多くの報告が、そのレッテル貼りの中で、女性体育教師が苦境に立たされているということに終始し、女性体育教師がそのようなラベル貼りに対し、どのように反応しているのかということについてはあまり触れていない。

そこで本研究の目的は、ラベリング論の視点から、現代の学校内において、女性体育教師が「女体育教師」というラベルを付与されることに対し、どのように反応しているのかということを明らかにすることである。

２．研究方法

１）調査方法

インタビュー調査（２００７年３月）

２）対象者

K高等学校の女性保健体育教師A

３）調査内容

①学生時代から現在までのライフヒストリー

②体育教師の役割への意識

を中心にインタビュー調査を行った。

３．結果と考察

女性保健体育教師Aは、教師になってから現在までに、生徒の反応や女性体育教師に求められる役割などから「女体育教師」というラベルを貼られていることを意識する機会があった。そして、そのラベル貼りに対し、ポジティブに受けとめたり、逆にネガティブに受け止めたりするパターンが確認できた。また、「女体育教師」という役割を演じたり、逆に演じなかったりするパターンが確認され、これらの反応から、ラベルに対する反応のタイプ分けをすることができた。反応のタイプについては当日詳しく発表する。

４．主な参考文献

・掛水通子（２００４）男女共同参画社会における女子体育教師の役割（1）：女子体育大生からみた女子体育教師の役割

・井谷恵子（２００５）体育教師の男女不均衡を生み出すジェンダー・カルチャー

・清永賢二，岩永雅也編著（１９９８）「逸脱の社会学」放送大学教育振興会